

七、至心回向

至心回向の文

前述までの大意は、全て如来救済の始終について、その領解の仕方を述べて来たと言つてもいいと思う。しかして本願成就の文において「其の名号を聞いて、信心歡喜せんこと、乃至一念せん」と、如来救済の全き世界の端的の相を知らされた。しかるに、今、我等は突如として、今までと全く異つた響を持ち、立場を持つ文字を見出すのである。かかる文字とは何であるか。曰く「至心回向」の文字がそれである。心を静かに本願成就文を拝読する時、

「諸有衆生、其の名号を聞いて信心歡喜せんこと、乃至一念せん。『至心回向』、彼の国に生ぜん願ぜば、即ち往生を得、不退転に住せん……」

実に至心回向の文字は、たとえこれなくとも、成就文は明らかにその意味を持つてはいないか。「其の名号を聞いて信心歡喜せんこと乃至一念せん……彼の国に生ぜむと願ぜば、即ち往生を得、不退転に住せん。」とあつても、そのまま完全なる意味を持つのである。しかるに何故に、全く立場を異にせる「至心回向」の文字をその間に挿入せられたのであるか。憶うに、殊更にかかる文字を加えられた所以は、この至心回向の文字こそは、本願成就文死活の重要尊なる鍵を握っているのではあるまいか。龍を描いて睛を点ずる底の第一義が、この文字によつて現わされてあるのではないか。

聖人の領解

しかるにこの至心回向の文字こそは、我が聖人の特に最重要視せられたる文字であつた。即ちこの四文字は之を「至心に回向したまへり。」と読むことによつて、特に念仏生活の始終、因果一切が如来回向の絶対他力によつて成就せられることを示されたる文字となれるが故である。

この至心回向の文字を、もし「至心に回向せば」と読むとも、「せよ」と読むとも、その他、何と読むとも、この文字は、衆生の行を彼岸へと振り向け、如来へと回向することを表わされたる文字となる。しかるに我が祖聖は唯一人、まことに唯一人、「至心に回向したまへり。」と信眼を以て達読せられた。この聖人の訓読こそは、一切凡聖の自力の全てを払って、衆生往生の因果の全てが、たとえその分厘の微細といえども、悉く皆如来の真実より回向成就せられたものであることを明かに示された教証となつたのである。

純粹他力

聖人はすでに教卷の巻頭において、

「謹んで浄土真宗を按ずるに二種の回向有り。一には往相、二には還相なり。往相の回向に就いて真実の教行信証有り。」

と説きたもうた。即ち、浄土真宗とは、浄土への往相と、浄土からの還相と、この彼岸への往還を置いて外にはあり得ない。彼岸への往相によつて自力成就せしめられ、彼岸よりの還相によつて衆生の上に利他成就する。しかして往相生活の内容が、教、行、信、証である。しかるに、その往相はその全てが如来の回向であり、還相も亦、如来の回向である。されば浄土真宗の一切が如来の回向である。これ親鸞聖人によつて開顕せられたる大無量寿経の宗教、浄土真宗である。

しかして、かかる回向の宗教の教旨は、真にこの成就文の至心回向の文字の上に発見せられたのである。祖聖をしてこの四文字を「至心に回向したまへり」と読ましめたるものは、そ

の純粹他力の大信心ではあったが、しかしながら、かくの如き領解を成就せしめたるものは曇鸞大師の教えであった。

五念門と往還二回向

天親、曇鸞の二聖によつて發揮せられたる浄土真宗は、いわゆる五念五果の法門であつた。

〈五念門〉 〈五功德門〉

礼拝門・・・近門

讚嘆門・・・大会衆門

入

作願門・・・宅門

觀察門・・・屋門

廻向門・・・園林遊戯地門

出

即ち一心に尽十方無碍光如来に帰命する礼拝門、如来の名を称する讚嘆門、浄土に願生せんとする作願門、浄土の三嚴二十九種の莊嚴を觀察する觀察門であり、第五門が即ち回向門である。しかるにこの回向を、往相と還相とに分ち、「回向に二種の相有り、一には往相、二には還相なり。」とせられたのは曇鸞大師であつた。しかして大師における往相回向とは、

「往相とは、己が功德を以て一切衆生に回施して、作願して共に彼の阿弥陀如来の安樂浄土に往生せしむるなり。」

とあるが如く、自ら念仏するのみならず、己が功德、即ち念仏行を他の一切衆生に回施して共に浄土に往生することを往相の回向と言うのであつた。還相回向とは、

「還相とは、彼の土に生じ己りて、奢摩他毘婆舍那方便力、成就することを得て、生死の稠²林に廻入し、一切衆生を教化して、共に仏道に向はしむるなり」と。

即ち還相回向とは、浄土に往生し成仏した後、生死界に還りて、衆生を教化して、共に浄土に往生するの謂である。されば回向とは、

「若は往、若は還、皆衆生を抜き、生死海を渡せんが為なり。是の故に『回向を首と為して、大悲心を成就することを得るが故に』と言へり。」

と仰せられるが如く、往生しつつ衆生に回向するのが往相回向であり、浄土に生じ已わつて後、生死界に還来してする回向が、即ち還相回向であつた。

宗教的展開

しかるに、親鸞聖人の宗教にあつては、回向とは、衆生より発する処のものではなくて、これ全く如来に属する文字であつた。

されば、往相回向とは「往相は如来の回向である」ということであり、還相回向とは「還相は如来の回向である。」 往還二相共に如来の回向の賜であるということである。

されば、証巻に聖人曰く、

「夫れ真宗の教、行、信、証を案ずれば、如来大悲回向之利益なり。故に若は因、若は果、一事として阿弥陀如来の清淨願心之回向成就したまへる所に非ざること有ること無し。、因淨なるが故に、果亦淨なり。知る處し」と。

教行信証とは往相生活の因果の全てである。往相は真実の教えを聞くことに始まり、それを通して、行、信がその生活事実となり、やがて行信の因によつて証果に至ることによつて成就する。その教行信証の全てが、如来本願力の回向である。されば「若は因、若は果、一事

として阿弥陀如来の清淨願心之回向成就したまへる所に非ざることを有ることなし。」と言われるのである。

還相回向とは、

「還相の回向と言うは、則ち是れ利他教化地の益なり。」

と云い、又、

「出第五門とは、大慈悲を以て一切苦悩の衆生を觀察し、応化の身を示す。生死の園、煩惱の林の中に廻入して、神通に遊戯して教化地に至る。本願力の回向を以ての故に。これを出第五門と名づく。」

この『浄土論』の文にはすでに、「本願力の回向を以ての故に」との文字を発見することが出来る。されば、浄土の証果を得て後、煩惱生死の園林に神通応化して教化地に至る永遠の菩薩の生活の一切が、如来の本願力の回向によるのである。

されば、回向の宗教は、天親曇鸞に始まって、我が聖人に至って大成したのである。初めに五念門の宗教においては、回向門は、礼拝、讚嘆、作願、觀察と、他の四門と列らんで、その一隅にあつたのである。しかるに聖人に至って、回向の文字が行者の宗教的生活の全面に光被せしめられた。しかして、かかる宗教的展開は聖人の独断勝手ではないか。行者はここに一抹の疑雲を残すであろう。

三願的証の法門

ここに於いて、我等は、更に聖人の領解の根底を述べるであろう。そもそも浄土の宗教が絶対他力教と言われる所以は、行者の宗教的生活の全てが他の力によつて成就すると言うことである。聖人、行巻他力論に於いて曰く、

「他力と言うは如来の本願力なり」と。

これ聖人が曇鸞大師の教旨によつて領解せられたる大無量寿經の宗教の全てである。本願力とは、本願とは法蔵因位の誓願であり、力とは如来正覺果上の威神力である。しかして因位の誓願とは、四十八願中何れの願を指すのであるか。もし広くこれを言えば四十八願全てをさすのであることはもちろんであるが故に、大師曰く、

「凡そ是れ、彼の浄土に生るる(往相)と、及び、彼の菩薩人天の所起の諸行は(還相)、皆阿弥陀如来の本願力に縁るが故に。何を以て之を云わば、若し仏力に非ずば、四十八願、便ち是れ徒らに設けたまうらん」と。

是れ全く、往相、還相、一切菩薩の行願の全てが四十八願より生ずることを示されたるものである。

かく述べられたる曇鸞大師は、更に、

「今的しく三願を取りて、用いて義の意を証せん。願に言はく……………」

とて、いわゆる三願的証の法門を示された。三願とは、第十八願、第十一願、第二十二願のことである。しかして、第十八願とは衆生往生の因の成就を誓いたまえる、いわゆる念仏往生之願であり、第十一願とはいわゆる必至滅度之願である。念仏の行者をして、現生に正定聚不退の菩薩たらしめ、やがて涅槃の証果を得しめたもうは第十一願の力である。かくして、十八願によつて往相の因を獲しめ、十一願によつて往相の果を得しめたもうが故に、往相の一切はまことに如来の本願によつて回向せられるのである。

第二十二願はいわゆる還相回向之願である。浄土の人は、一生補処の菩薩位に住し、やがて生死海に還り、普賢の徳を示して一切衆生を教化して、共に仏道に向わしめるのである。

これ即ちこの二十二願によつてのみ、如来浄土の徳を人生に輝かしむる如来浄土の眷属の誕生することを示されるものである。還相はただ如来の願力の回向である。

以上、曇鸞大師は、三願を的らかにとりて他力を証したまうが故に、三願的証の法門と言うのである。この三願的証の法門こそ、我が聖人をして二回向の宗教を開顕せしめたる論証である。噫。二回向の宗教こそは、源を遠く大経の「至心回向」の教えに発し、鸞師の大信海を通して、我が聖人によつて大成したのである。

願力回向

然れば五念門の宗教は何処へ行つたのであるか。聖人二門偈に曰く、

「菩薩五種の門に入出して、自利利他の行、成就したまへり。不可思議兆載永劫に、漸次に五種の門を成就したまへり。」

法蔵菩薩こそは、永劫の願行において五念門を修して、名号を成就したもうたのであつた。五念門とは如来の行であつた。法体に成就したまう行であつた。名号の内容こそ五念行であつた。しかして、菩薩はいかなる誓願によつて五念門を成就したまいしぞ。聖人答えて曰く、

「云何が回向する。心に作願したまいき、苦悩の一切衆生を捨てずして、回向を首と為て、大悲心を成就することを得たまうが故に、功徳を施したまふ」と。

如来は大悲そのものである。大悲は唯、回向をその生命(首)とする。如来は、如来の生命を、願行を、力を、徳を、大善を、ついに如来そのものの全てを衆生に回向して、衆生を撰取して、衆生をその願行によつて浄土の菩薩たらしめんとする。

噫。極悪の衆生、善知識に値うも回向なり。真実教に値うも回向なり。真実教を聞くも回向なり。教えを領解するも回向なり。信ずるも、行ずるも回向なり、往生するも回向なり。正定聚に住するも回向なり。仏果を証悟するも回向なり。やがて、衆生を濟度するも回向なり。法界の仏事を挙げて、ただ至心に回向したまう仏の願力以外に何もの存在をも許されないのである。これ即ち、至心回向の文字によつて示されたる浄土の宗教である。第十八願の宗教である。